人吉球磨

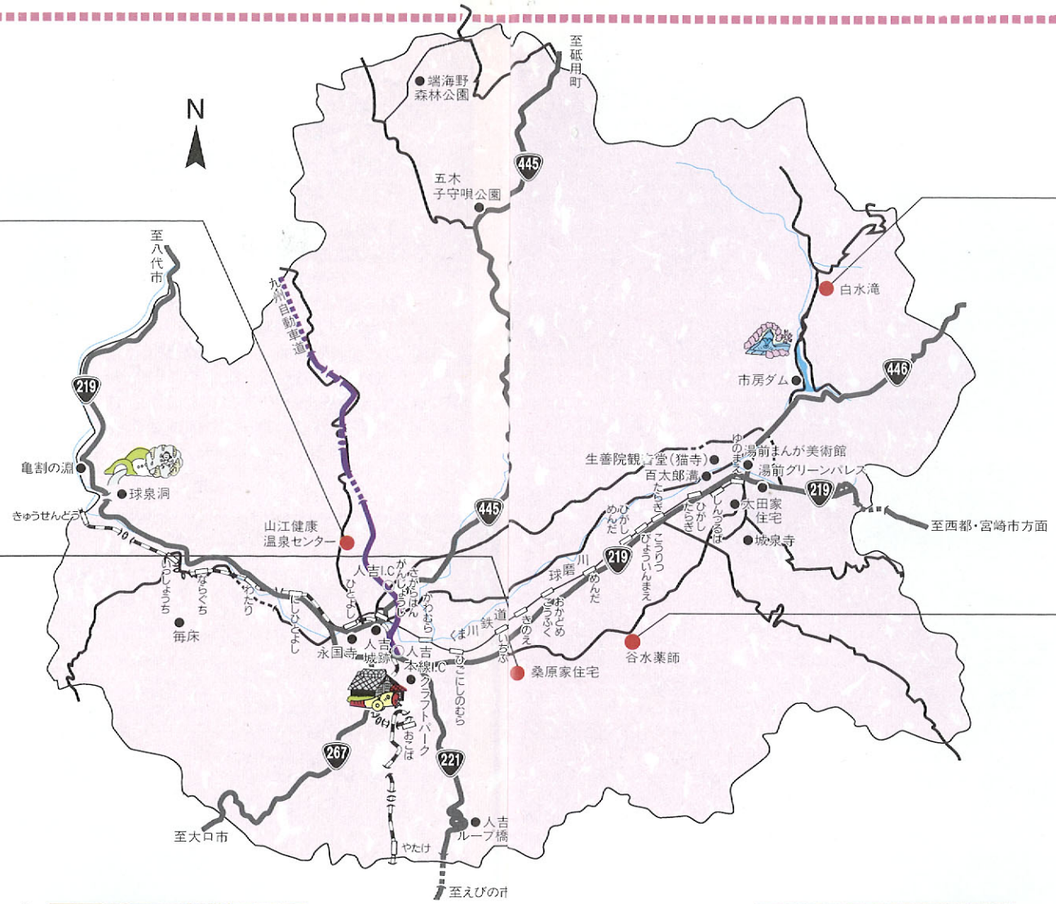
春に誘われてやって来た風のように気ままな旅人に大地が山が川が話してくれた物語

伝承の生きる里

岩をも砕く勢いで激しく流れる球磨川。人々の信仰篤い古寺。山里から聞こえてくる哀愁漂う子守唄。語り継がれてきた伝承を訪ねて春霞の里を旅した。

「山江温泉健康センター」
山江村の古い民家や神社の良さとコンクリートの壁を組み合わせた建物。露天風呂、エステ湯、うたせ湯など7つの健康風呂があり、食事や休憩もできる。隣接する「ほたる亭」は栗やヤマメなどを使った料理が自慢の情緒あふれる宿。

「桑原家住宅」
人吉・球磨地方に多く見られる鈎屋型の民家(国指定文化財)。その建築様式から江戸時代末期に建てられたと推測される。「ざしき」をはじめとする三室と「だいどころ」と「土間」の二室を直角につないだ形が特徴。



「白水滝」
球磨川水源に上る途中にある滝で、荒々しい雄滝と美しい曲線の雌滝の夫婦滝になっている。それぞれ白龍王橋、白龍妃橋の吊り橋が掛かり、上から眺める景色の美しさは圧巻。
(写真は白龍妃橋)

「谷水薬師」
日本七薬師の一つに数えられ、健康に御利益があるといわれる。紙を噛んで紙つぶてを作り、仁王尊に向かって自分が病んでいるところに投げ付け、うまくくっつくと病気が治るというユニークな風習がある。

▼急流球磨川から生まれた話

ラムネ色をした水が、岩に砕かれ白い飛沫を上げ流れていく。日本三大急流の一つに数えられる球磨川には、いくつかの言い伝えが残っている。

「亀割の淵」もその一つ。江戸時代、人吉の町人、林正盛が球磨川を舟で行き来ができる川にしようと開削工事を行った。ところが、途中、亀に似ている大岩が川幅いっぱいにどっかと座している。岩はとても堅くて割れず、工事は中断してしまった。そこで、お告げに従い岩の上で繰り返し火を燃やし、岩を割ったという。

球磨川「亀割の淵」付近

岩の間を深い緑色の水がゆったりと流れる。両岸に分れてしまった巨大な岩を前にして、岩をも砕く正盛の意思の強さを見たような気がした。

球磨川を遡り、「百太郎公園」へ向かう。川沿いにドッシリと立つ百太郎堰には悲しい人柱の言い伝えが残っている。球磨川の開削工事が成功したのと同じ頃、川の水を利用した用水路作りが農民の手によって始められた。しかし、水を取り込む堰は造っても造っても大水のたびに押し流されてしまう。水神様のお告げにより、百太郎という男が堰の下に人柱として生き埋めになった。翌年完成した堰は、どんな大水にも流されなかったという。百太郎溝と名付けられたこの溝は今も周辺の田畑を潤している。堰の黒い岩肌に手を触れてみる。当時の農民の苦労、百太郎の自己犠牲の精神が胸に熱く迫ってきた。

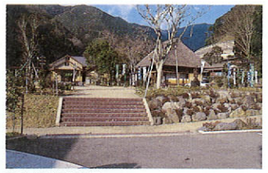
百太郎公園

▼哀愁漂う山里のメロディ

おどま盆ぎり盆ぎり
盆から先きゃおらんと…

山里に、もの悲しいメロディが響く。

五木地方の子守唄も伝承の一つであろう。「五木子守唄公園」はこの子守唄にちなんだ公園だ。千(せん)級の険しい山々が連なるこの地方では、貧しい農家の娘は口べらしのため子守奉公に出された。我が身の不幸や子守の辛さを嘆いたこの子守唄は歌詞もメロディも様々にあるという。園内に子守唄をテーマにした彫刻があちこちに立つ。青い空を見詰めているそれらの彫刻は、やっと故郷へ帰ってきた娘たちのようだった。



五木子守唄公園

▼古寺に残る幽霊話

人吉球磨地方に多く残る古寺にもおもしろい話がある。幽霊画の掛け軸で有名な「永国寺」もその一つ。本妻の嫉妬に耐え切れず球磨川に身を投げた妾が、幽霊となって本妻を苦しめた。そこで、この寺の和尚が幽霊を成仏させるために絵を描いて見せたといわれる。

幽霊画の掛け軸

長い黒髪を振り乱し、白い着物の幽霊は、本当にうらめしそうな顔をしている。幽霊が出たという湧水池を見に本堂の裏へ回る。水蓮の葉が水面を覆う池はシンと静まりかえっている。

〝いかにも〟の雰囲気に思わず周囲を見渡してしまった。

通称、猫寺とも呼ばれる「生善院観音堂」にも猫の幽霊にまつわる話が残る。昔、この場所には普門寺という寺があった。ある日、寺の僧が無実の罪で相良藩の刺客に殺されてしまった。それを知った母親は復讐を愛猫に託して自殺。以来、夜ごと猫の怨霊が現れ藩主を苦しめた。そこで怨念を鎮めるため、普門寺のあったこの場所に観音堂が建てられたという。

永国寺の湧水池

門前には狛犬(こまいぬ)ならぬ狛猫。観音堂の横に猫の墓。大きなキンモクセイが境内に影を落とす。観音堂にそっと手を合わせ、日が暮れてしまう前に急いでその場を立ち去った。

◆　◆

人から人へと語り継がれてきた伝承を辿(たど)る旅。喜び、怒り、哀しみ、楽しみ…。そこには生き生きと暮らしを営む人々の姿があった。

生善院観音堂(猫寺)